上
伊地知文庫
文庫20
235
1

文庫20
235
1

三卷内

月花堂

山門不動

正月之部

一 春立
四 白雪
七 水仙
十 霞
十三 梅
十六 若菜
十九 うぐひす

二 若菜
五 鶯
八 梅の花
十一 うぐひす

三 春立
六 若菜
九 梅
十二 雪きえる
十五 柳
十八 霞
廿一 木の芽

二月部

廿四 山下水
廿七 縣石
廿 うぐひす

伊藤氏蔵書

二月之詞

三月之詞

俳諧集巻第一

春歌

正月の初　むつきとも云なり

一　春立てよもの　四方の乃うもし　雪乃さゆる
　　初のとく　ゆるすべらの

春立と云つゝあるよりはやく山も春くさいみもらん
ゆのくと春をもとめふかひ更乃うく山路をひくく
あらゝ玉ぬき　三海の新ちまつ　地ちうくひをあこ
二月　一筆ひとるもしるよ　ちゝひとのづる　板ちうるちうし
正月元日乃雪を乃　春とゝ　雪乃さゆる
光ゝくゝ板大臣ゝ下恵くゝ　春ゝ乃大臣

春毎ゝ　今ゝ乃ゝ　春ゝ乃ゝ　つゝ乃ゝ　春ゝ乃ゝ　あゝ乃ゝ
三月　一筆　春立ゝ　ゝ乃ゝ　春乃おさ　ゝ乃ゝ　春ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ
正月元日乃光天乃南　年乃星ゝ　春ゝ乃ゝ
乃ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ
四　一　春立ゝ　春乃形　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ
正月ゝ乃大内　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ
おゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ
五　一　ゝ乃ゝ　春の乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ

正月元日より末のあそとまて事也
一若菜つむ 六日 なとハ　春乃野の志川か　雪きゆる
野乃けふ　生田の野辺
撰人の作さゟ若菜つむ地ハ生田乃小野のあまた数々あるを
一氷様とハ 七日の　氷をためしさく正月元日ニ大内へ奏聞する也
氷めしとハ氷川さらさきの寸方あらくためハ吉事也
今も志ハ年八余を申よく次晴の氷池乃あの津きめくを之を
一子日するとまこ 八日の　春の野ニ人出しあそひ
正月乃初子の日野ニ出て小松を引ていはひける也
倚松根摩腰千年翠満手
子日ニこそ二葉の松ハ千代をまもるへしと

君か代乃ためし乃松ハ千とせの松の御代ひさしきもの
初春の初子の今日乃玉箒手にとるからにゆらく玉の緒
一梅乃咲まて 九　鶯の鳴　雪のうちに　藪原雅
春の月　難波津　初瀬
梅かえに鳴く鶯乃声ハ白妙にあらそふ雪ぞふりける
むめ乃香も春の夜乃匂ひも春や昔の月ならぬや
なにはつに咲やこの花冬こもり今を春へと咲やこの花
此歌をよみてむめのはしとし也 梅ハ花の兄なれハ
此歌ハ応神天皇の御子ニ仁徳と申 難波ニお
はしましける時王仁か奉りける歌也難波の宮ほひし
奥書にしるしおくなり

仁徳(にんとく)位につき給ふ時 阿出上
今ハ春べと咲や此花といふ歌をよみ
是ハ紀貫之(きのつらゆき)か仮名序(かなじよ)にかきまめてよめり
一 霞(かすみ)まよふ
うち霞 春風(はるかぜ)ふく 春の夜の月 雪きゆる
山の霞
春霞たつ
野にも山にも霞て霞あふ春の夜の月
あさ霞 春の霞の立こむる山
春霞 川見えて 霞ハ霞の山
一 鶯の鳴音を八 むめの咲 雪きゆる 春雨 山
春の雉 春駒 鶯生 呉竹 花のにほひ

四

琴(こと) 初瀬(はつせ)
鶯の聲 雪消(きえ) 山里 [illegible]
[illegible] 松の [illegible] 山
[illegible] 鶯の木伝 むめの花
[illegible] 鶯の [illegible]
鶯の鳴 [illegible] 山 [illegible]
林鶯(アウリン) [illegible] 鶯(キン) 鶯曲(アウキヨク)
一 雪きゆるまゝ 日のさす 春霞 草のもえ
霞 [illegible] 春の [illegible] 川 [illegible]
[illegible] うの [illegible] 夜の [illegible] 月の入
[illegible]

夕の野辺に添て涼しく白雲と月乃入ぬときゆるなりけれ
野すゝ乃下をそよすゝろ草の上に流れ遠くにゆる春のあそ雲
まぬかとよまきく合雲の形ふ遠からすきえ出ぬ春く見えまさる
流つゝし名ぬ乃を雲をきよから清瀧川乃水ののらぬを
名ぬとハきえぬと云すれ共くとハ花よろすふりまさる

十三
一秋ふくぶよりを
紫なりし
治をよ日の梅る　田野菊を　根芹の
ふ四る
秋治回地芳し維經とありし
川の乃青くぬらき　芳乃清めくむ

十四
一野乃下よえよりを
鶏のいちふ　春乃野よ面白く
野べにこの乃人とりそ流る花とゆるまま春面の隣しなかれけれ

いそのかみふるといふもさかへまつらふのをはなりし
いそのかみふるき都を来て見れハ昔かざしゝ乃花咲にけり

十五
一柳よりを
萬城山　田つら　流そひ　春面　くひき　鶏の声
柳上鶯飛所に琴とありし
花の入乃柳末の柳春くま遠ハあたれ芳と思ふれれしまする
花の入よ清水をなかし柳の糸をつゐとそこそ立とまりつま
春柳乃うつくしき山の彩りよ景を縁よあそふいとゆふ
東岸西岸柳遅速不同とありし

十六
一花菜よりを　香の入へ流しし　春風吹きゆる　舟のうち
蝶のまふ　よもの乃なとも

十七 一あしためしよハ 稲云 雨のゆふ 酒とくひ
八角とる者おさしろあしためしよあ〳〵ゆふ〳〵そやのき
あしためしとゆふ田をもち高へのやうく稲をとくひ
事なり正月よりもる也あしたをいなるのすなり
十八 八角とる八月のなり
一あしたをでゆふよハ 酒 竹乃葉 さゝゆふ 板屋よ
わすれぬるを あるあれをすく結そう
行を通ゆふをそ正月十四の秋乃ふ
ゆふ男のもりてゆふ蒔をもりそれ
しゆふ〳〵ゆふくあれ乃ゆふ
まつゆふをそゆふ十六日をゆふ

あのとよりゆふをあるかゆふの稲白さ月乃よ
十九 稲をゆふく蒔ゆふ 踏ゆふ
一をゆふ〳〵ゆふよ さえ清ゆふを海ゆふ 日新乃ゆふ
ゆふよゆふ雪のゆふ 織よ風乃ゆふ さえゆふ
ゆふゆふハせぬを 風雪ゆふ雪ゆふ
廿 一ゆふゆふ のゆふゆる事なりあまをよゆふ乃ま
ざゆふゆなゆを
廿一 一木乃葉ゆふよハ 雪雨 山のゆふをゆなゆふ
廿二 一雨なるなゆをあを 雪のゆふ 神のゆふ 雪の雨
廿二月 雨ゆふゆふ
廿二 一ゆふゆよハ 雪よゆふ乃ゆる 弱のいゆふ

かすが
春日山をさして　春日山をみかさ山と云
春日野乃駒のふところなれや深山乃草やわか宿ならん
廿四
一鶴かなくなる　同紋をも　苑の咲　春のくれ
玉章　やとこせ
鶴かなくとこせの花乃いろまさり月にいさよふおもしろき春の
ありやといふ津の春よりふくさんとう山々を涵ゆるまね
是は深山乃たま度かくさきとう乃沿附にいきめしの
中納言ふかく沈殺の花袁鶴の乃ち色ろさき
とく深山のとしとや
玉章紋雲の鶴の花をこさそなふ久かさん
二十八 綾涵秋月
鶴の涵ゆをゆく琴をうけとそ玉

廿五
一同をもととする　つた 蔦と鶴よ付くし鶴の綾と云
里人乃ゆきさふ　霜のふく
せきいるく　うらのかへる　おもかけもとくふ
里乃内うとむるよし
ころひ出る雅深乃あるいを春のいさのかうむる花の縫字
一きても鳴よそ　黒越乃床　霜　雅乃ある
春草よのるひく　まてもくらともある　雛なもる
廿六
一蝶乃わそふよそ　情よまり日のうけいる　梅　やまかさ歎冠
春の野小ゆきも涵来をあるぬ　草むら乃うま去川う
鶴まそくれるかな紀ちをやとしろ新たの梅れむのきい蝶
梅よそてふこのましかくるを

一堪忍のよそ　まことの人のこころとまり
やまとなる　井の
山ふかのおもしろきよそうなるあるの里人ことこそとまり
一九　枝のもとに川ありそ　雪のおもしろきあるし　岩ねの　歳
ひとしるる枝のもとにもまことに今一しかのこまのもとにもとり
一十　春日のよそ　乙乃小車　雖よゆきとのしるし
さうはさとのもとにて
二月の初のころのまことの山　雪とのもとにてまことに
一十一　菊のよそ　流川乃ふかのゆきとれたるとのもとにみる
月のさしてのもとにて　八橋乃波時のふかなり
まことにこんまの　乃つまの新をは追治のもとにさとのもとに
朱雀院の

一二　紅乃初のよそ　雖のすり　ちるゆきて　雖乃よそ
枝の春の紅葉　さのもとにて紅のもとにて
咲ものの初月乃ふかをとにて黒さのもとにて不ふかのもとにて
紅の別とハ二月十のよそ　雖乃よそ　入滅のもとにて
二月乃おもとにもとにて同月のもとにて
一十三　ふのよそ　春の時乃ふかの　覚よ梅もとにては
かへるのもとにおるの事なり
古乃乃くいのよそ　春のもとにてもとにの新のもとに
春されの時へよりの乃のもとにて
春のもとにもとにて春のもとにもとにて
一十四　枝乃花よそ　爰にて今時のもとにて

松乃花八百年に一度咲花といへりされはよろしく千
秋の春をもすれ千代とかけり百年に一たびさきにほふ
も松花をみる春かな

香丸さへけり　友　清ド

廿五
一 花乃咲よるを
むめるといふそよし　春の夜
春の三句四句めには花あるハむめ咲たると此外もあ
縁乃季のむつに存すりとらく萩あちうると付そよし
郭公ひおきそ御つ春雨小花の下ひもいふよそとくらん
只今もわらにせうし山里にむ乃後に人めみるうかう那
年ハ進ハよそひハむ者なるかれと花をまれと地をひかは
養性　自為　慈父母
友ハむ乃ちくみてかり

卅六
一 花のちるまよ子　春風乃吹　友のわさき　人わひの多
香乃え寄る
きぞいふ紫御むひそしつのをおくわるとも友のむとおしゐ
かいうとは父母とうくなら
花ちれとも香ひの事かさそいとひ風乃吹ゆるとうをもち
むまはよ香ハ古葉に堪乃あら春の花らそしる人かへる
山寺の春夕をきそ春風を入わひ乃多にまするやうかれん

廿七
一 桃乃花散るよを　三月乃詞　やよひともろなら
海のうかむ　抱人乃富　子為るまえり
一 梅たいなとよ友　益　牛
春の海乃志川か乃　春の海よ舟な

春乃比く川くてかなゑいのるさ
梅貝ろろしき梅乃名あかうらいるら
卅九
一蕨打るまゝ　春乃野の神の中さて　名あひゝとむ
ら治乃山の峯　いしも紀人乃住山なるらし
此春を雑するせん外紀人乃かゝミふきぬめる農のさまらひ
先公ちおく中の君乃様ゑを深あるち中乃君かり
中まて源氏の巻ふもそくの文乃流むきあからそ
そくまを語るく後るするる山里より住みふ山乃あさら
そくら？くれ？き語の流ひかまさある樹まるい
となりて中れ君のさいくを語の河乃流るなら
君もよそあそこの春ハ流くさつよを立れぬ物まるひそれ

あさりよミ絵本の君とゆハらる？のあゆよ君也
四十
一菊代よみ　なられまる山乃あ関まる　嬉乃鳴　津ま？
孫さりも　せきいて？なとして
四十一
一もみ達するとみ八　婦るき嬉よ　荒田のえら
若さし妹ら嬉よ？あれよ？う流？まで？達のよして
波ちふやあれうさ思のつか芸派むしき紀乃文よそあらん
流かとは庭なられるある
四十二
一菊咲るとよ八　池のうすむ　白河乃宿　郭公
田子の浦かま乃名　春日山　柳よ春のくてく　住の江
田子の浦乃？さ入？霞するとうきて桜んとめ人？くとあ
？やされ池の菊ふと咲まなる山待とかなさを今やとさめらん

信乃国の打ようきまる義のなし風乃たちよりあつやこるこん
春日山おろし文民乃おもふ　春の景さ紀よ名ら
いせ地方よりの乃おもふ　紀のあるとつひら寄るら
その高ふ義あり
ぬまつも志ろく打ぬ乃国よ春景くこめ　とそふ
四十三　一歌みくよハ　嬢なく　ようし殿の　井ま乃里
蝶のあうふなとこ
まつ春紀の乃里人こそ者ハ　ハ生咲山ふさのむ
四十四　嬢ふまの地色と月後せこ　れ山乃屋へさ紀ふ
一歌　戸乃ハ藤なとよこ　春風のあ〜さ　浦永の
ゆる　なつ祢

紀ふ源氏と後よさもこ乃ハ法河永よくこの日乃
たつひなをのふ俄ふ風あく吹くこなちさも
くこと〜こ〜なる祢おちくを屋のはさふ祢焼し
源氏紀出祢　月と月の日ふち三月を乃
日今年の三月三日も乃日ふそ　今こを紀ふ永
よこそこ〜ひそ〜ふ　紀もこの日ふ〜ふ　ふち
こ〜こ〜ふ〜ふ源こそ　今こふよや地乃ふあ〜さ
源氏乃ハ　ふ〜ふ源こ〜ふ　紀ふ
四十五　一ふの紀ふよこ　藤と後　春紀ふ〜ふ
一こ〜ふ乃ふ　藤ふ　法華ふ　春紀ふ
日春の春ふこ〜ふ　春の紀乃ふ　法華ふ　ふ

きえつきおとろへるとすなら春よりあれそ春の山へ
ゆくはるの雪のあつふるおりふくあきのあとそみさをを
ふるとそおとろをみくさをとろとなとあゆへるる
四十七 繼尾のこの月まるる
一をそ樵なとよる　山よ霞ゆる　山里よ春ゆきぬ
四十八 一さを月ひめるとたは　山のとをみくさ　月乃月のつ
四十九 かひめ春山をるあうもる秋とそたれあるのき
一ふる鶯よる　春河乃ふ月　ふるまつ　ふるまつ
五十 賀茂の瀬川　こう流川るとは結くこの
一ふる和布はは　波るふ月　ふるきの水あるこう
大流のうなとるこ

一五十一 ふるあ乃ふるよる　春夏　黄代　春柳風よるひく
一五十二 門田乃ふ　ふるふ　夏　春の帆柱　ふるさと乃春と
一五十三 ふるふ咲よは　夏田乃水　春乃暁
春乃暁のふるるのつかの春のつかふるあきひるふる秋よるふ
一五十四 ふるこ焼よは　夏氣　山のふをむかるこう
一五十五 ふるをるさなるこ夫は　初秋結くこう
春のふるるるこあくふ河るこあくふ

俳諧小筌夏部第二目録

四月之詞

- 一 更衣（ころもかへ）
- 二 卯花（うのはな）
- 三 ほとゝぎすを
- 四 杜若（かきつばた）
- 五 若葉（わかば）
- 六 玉まく葛
- 七 神祭（まつり）
- 八 葉乃陰（かけ）
- 九 [illegible]
- 十 ほとゝぎすをまちもとめる句
- 十一 あふひ
- 十二 菖蒲（あやめ）
- 十三 はちす

五月之詞

- 十四 五月雨（さみだれ）
- 十五 水鶏（くひな）
- 十六 螢
- 十七 楼
- 十八 撫
- 十九 ところてん
- 二十 蚊遣火
- 二十一 百合草（ゆり）
- 二十二 梅乃雨
- 二十三 [illegible]
- 二十四 鹿子（かのこ）
- 二十五 氷室（ひむろ）
- 二十六 雲のみね
- 二十七 夕顔（ゆふがほ）

六月之詞

- 二十八 納涼
- 二十九 石川
- 三十 扇（あふぎ）
- 三十一 夕の雨
- 三十二 あつき日
- 三十三 蓮
- 三十四 清水むすぶ
- 三十五 風かほる
- 三十六 [illegible]麻（あさ）
- 三十七 凢
- 三十八 [illegible]
- 三十九 行遠
- 四十 鵜船
- 四十一 なごしのはらへ

拾遺集巻第二

夏歌

四月の初　　卯月とも

一　夜うちなくほとゝぎす　声のうちにおもふ　　霧乃こさゆる

くらゐのまと　　若地をゆく　　おやのいこうるもとより

まつとて夏さしのぼりしのあり　　あさのくゝ　　茂ま

葉のうへよ海　　秋乃をしれ　　れて夜うへ今さくふまとうゝみ

相ゆめ　　ほとゝぎす　　秋乃をしれ　　ほとゝぎすなくよきこゝる夏山の峯

くらゐのまとて　　夏をうゆめ　　ほとゝぎす　　おやのいこうるあき　　脇

夏をうゆめ

せイ　タイ　ミテコヲミ　カルル　イハホノカタニ

まつ若地　　山家　　桐　　霧　　肩

一　卯花　　郭公　　月　　山のうへ　　玉川乃里

乃渡せ　　波のうへ　　かまて　　行　　さゝ　　玉川のさと

神　　おくゝ　　ほとゝ　　泥　　卯花　　ゝ

うゝ乃花の　　ほとゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ　　山さと

三　郭公なくこゝ　　茂の　　ほとゝ　　秋村　　秋の家ゝ　　ゝ

ほとゝ　　機　　流乃ゝ　　乃里　　夏月

俱　　ほとゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ

山よ　　流ら　　池乃　　流　　ほとゝ

ほとゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ

郭公　　ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ

郭公　　ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ　　ゝ

いはせんぬ秋わまくの時雨まてくとやハむつ夜乃そゝう
櫻乃春風もうしとかくをよ花ちりの雲を見てそゆく
卯の花咲はなみれぬと時鳥月乃かけの空よ鳴なまと
四
一杜若のきはよよそ　淀まに　入る　月と　池乃ぬなはと
浮世は体らず
紫乃ゆかりそ海まて月の池乃ぬなはのそひかまて
ぬなはもあし池よある浮なたら
花のをまりをさき杜若人の色を見まて緑の水
入る月のきとてぬまの杜若
月とを海てをなら　足をまよふさまと
五
一草葉をよまて　月乃浮のする　葉を付くるし

さし出く月の影と水のうき草まの秋の風八まだ
花おし雁の木乃葉の影をさそふ月乃影まさまる
六
一むすまくむよまて　秋のをし秋なしとらし
むまくむとよ蔦のうのまるもと
七
一絲まつよまて　車　酒　葉人　涼来乃志ら紀なと
絲まつ八先のを乃月をそう付く海まり
月とさるわく七夕のはるとよし
八
一草志のるよまて　花のうきを　室田　古箱　古きを
ゆきて夜ゆる　五月雨　鍋をまり　涼乃ゆう
大わきの月外下草まおりわさくやうを家よ秋本けるか
九
一ふしと草よまて　種こ　蝶

十

一 ものよ 郭公 ものもとひとくは 花よまもとをはひとくは

花よむもとひとくも 時ものもの八 夜なり

十一

一 あつひとりと かとのもとはと

八月之月 さ月ともろうり

十二

一 あやめよと ぬま 彩 八月ぬ

高の彩乃 思ひの ものもの八 ぬろあやめとみとぬ 夜ろり

十三

一 ろの 彩ものと八 ものを 八月のあろうこと 光

十四

一 八月ぬよと 夜のいとりとよりこと ろる 夜のなとさ

ゆとのこゆる 橘と ろの 蛾ろ よ前ろりとを

けろ あやめなとり

八月ぬよぬ くひんあ あの泊の 泊もとそれ

ぬ 乃乃人のとくと 綾くと ろとみとき乃ろ

八月ぬよけと 夜ろあり乃 花と山 乃ろ ぬもあぬよ

十五

一 あやろ 咲よと 四乃ろ ひのろ乃

八月ぬ乃ろ

夜乃 ろの中と 泊よあろ乃 花やとろん

十六

一 夜花よと 川ろ あ 蛾とと 竹乃とよく

八月乃 月とと 蛾泊 蛾 蛾やうと

ものとの 夜よ 夜と八 夜乃の 花やろと 夜ろん

ものとの八 夜乃 夜と八 夜乃もえとと ろと 夜

夜 火 乱花 蛾 泊 とあろと

十六 たちばな
一橘にハ　時鳥　五月雨　さ月雨と　のきさし
むかしをしのぶ

十七 ほたる
五月雨に菖ふきにし軒ハ母の里まくら白ハ紗らん
一蛍にハ　夜山乃こもれ　ゆふさ日　垂なと
夏山の木の下かけの木末の露こほれ初て蝉のうへに只吹ゆる
秋をまつ心しられ森に鳴せみの声乃奏や下ひふるらん

十九
一さ月にハ　夏山　木の葉　月くらき
五月山こすゑに高くなくせみの声もかくれ入なわ
ともしともる山のすそハとなりて簾をいつな
里稀ハひかりおよしとやせむとて簾られ
ところ宿をかるも月のなかり

廿 か
一蚊遣にハ　小家　扇　夕そよ　くれ乃おもひさ
藪しげきものくらき夢なと
かやり火乃煙にむせさ夜の秋ハ蚊ふせやに稀にせそせ

廿一 ゆり
一百合にハ　夏野　野辺乃露をとの

廿二
一梅乃実なとにハ　夕まくれ鶯の鳴なくもし
継の寄　梅乃実とハ五月雨乃ろ

廿三
一蓮ことかるにハ　池　水の上　時鳥
まこもかるの長みきの夕暮れねぬにめさきし時鳥

廿四 かのこ
一麻手にハ　夏川山乃ふ　雉の　花のふすま
富士乃雪のむらくなと
六月に夕　今宵月ともろともる

一廿五ひむろ　氷室なしとよそ　山乃おくの氷室を　忍ぶきたちもて
若葉むきをわく　九重涼しき　松乃陰ゐるとは
六月を涼からうまし山影乃岩清水やひむろならん
夏の日も涼からうる松乃陰こそひむろ乃もとうら
ひむろとも六月頃より大内へ氷室より
氷をさゝげめきもあり氷のきこゑくさいよな
らを治仁徳乃御代よりぞ傳る

一廿六 むらしまよそ　風のそよぐ　むら薄
たゝ原　木かげ　夕立の紀　柳陰　月きる　梢乃上
松乃岩井乃まどむきにおいしく夏もを忘るゝかゝ
手ぬぐいを涼からうる夏秋すゞき秋をやどる月かけ

夏の流れ涼しくもある夏秋川を夕くれ乃夏のすゞしさよ

一廿七 夕立あるよそ　すゞしさ　露のしづき
日のさやうふ清水

一廿八 雲のよそ八　出る雲　梢乃さわなる山るよ
鳥乃宿りよさりくなとよし夕まぐれ川をこゑ
雲乃うねとも六月山のうちとにおとくしぶき雲の
山岸うるよ立ちのぼる

一廿九 石乃竹よそ　涼しき　経なとよし

一卅あめつき 扇よそ　舞　夕かせ　葉の紀
ゆくすゑ川扇子の風のなら　うの葉ちるき
むしあきのせと　流しへ行舟　夏よのちら

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一清みむもとつよそ　柳葉　岩これ　お坂

一風ふるなくふ　楊乃咲　葉乃さくら

[illegible]

風ふりとそ月そ薫風とそ風吹ふとく

[illegible]

一楊あさにそ　[illegible]園なと

楊あさとハふさのもの[illegible]

一乱なとよハ　乃の[illegible]

[illegible]

一[illegible]なとよそ　ふるとよ人乃あり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]　[illegible]　葉乃上

[illegible]

[illegible]

四十うの
一 物語 あなとうとき　月のうつりさしつつ　宇治川
の瀬乃音のうつりさしつつ
四十
一 かつらのうつりとて　六月ばかりの夏の山かつらを
ながめて　ながめをなすてこの人のうつりを
うつす代にもいつるうつり
あるを月乃うつりをなすてこの人のうつりをの
あるうつりをなすてこの波のあさ乃出汐をあ今なれ

七月うつり

一 豆煎 四たきつさ　七夕 七わかさ　扇うく 十しろ　扇 十三ちさ　落 十六ちまち
桐 十九　初秋の月

二 一紫ちり 八ひり　虫 十わさき　猿 十四ちさ　女郎花 十七ちまち　小萩の花 十九ひさき　星月夜

三 月影 六まち　桐乃月 九ろ　秋 十二ひさき　鹿 十八まち　鶴 廿ひさき　秋

八月之部

九月之部

源氏物語書入 三

帚木

七月ばかり　夕月夜

一　秋になりぬれば　一葉ちる　初風　風の涼しき　あさぼらけ

二　一葉ちる　柳下もとに

初風

桐とひとつ　一葉　桐よりもまづ

極桐葉　知てとり　秋

三　桐の葉

山里　松　松をよやもとに

桐の下なる

桐の葉　山里の夕月夜　人をすゑ

四　七夕なれば　九月　月のあれば

河の姫　琴　たなばた

海ちかき　七夕の年に　歌　ひのこと

碎のこと　合

六　桐の葉　秋の花　風の

桐の葉　秋の花　風の

七　あさぼらけ　蓮の葉

蓮の葉

八　虫の　まのあたり　蛍の

萩の露　月夜　あるじの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

十七

一小雪降なりけり　雪の降りつもる　酒を敬

大井乃里　乃を略みて

海底大井の里より　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃を略みて

十八

一むら雨降なり　むらとは

一雲間出なり　秋の田刈りて

海や波うち[illegible]

おもひやりわたりの一むらの雨降る時の[illegible]

三笠山と云山城乃名所也

十九

一星月夜よし　雲晴て

星月夜とは月の光なくあまねくあまてらすを

なりと月よみの月ちるを

二十

一楸　楸とは[illegible]

楸とは[illegible]

二十一

一ひぐらしよし　風そよく　蛍乃ひかり

秋乃夕ぐれ

二十二

一雪のくれよし　秋風ゆる　月のひかり　山の[illegible]

[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]

[illegible]川　[illegible]の[illegible]

初のくとゆふのうれの夢よ清しれ行あとをとおもふ

一廿四 ちりとのはるるよる　秋風吹出る　月のあや

一廿五 稲乃はなさきそろ　暗山のあらしのなとう

一月のさやうも　河面のそろ　そろのみあぬ

稲乃花　あらし　秋の涼さ　蛍乃ひかり

雲ことうれる

白やうよりの新うら花うれ敷をゆるあきの乃とれ月

面ノ樣月下樣家うれ　とうれ

酒とうまくうあよりくのもの面あまの之賀よりおもも

月ゝ也　八月のくよ　花ゝそ　ゆふ　乃秋よりわぬ

一廿六 雁のよる　野原　雁の声

一廿七 涼乃里　出雲の入口

雁のまの八元れ面風よおそふなゝそる秋乃夕くゝ秋

一廿七 ゝそれよる　鹿乃鳴　野原　高　も

ゝのゝとあゝのゝそれ時よりうよみく海ゝ月そ物ゝふ

八月乃月　そ月とする

一廿八 ゆゝむしよ　風のゝ　ゝくゝ乃あ　秋ゝあ

あひ乃ゝとねまゝゝ種　秋乃月ひと分ゝゝ

まゝひ乃独よゝしんなゝ

一廿九 ゝ月よる　稲ゝまあ　分ゝしれ　浦茅生

乃宿　ゝる里　樣人乃涙を物　伏見の里

おゝの里　若地よあれるなとゝ

秋風のふきにしあきのはつかぜは
さむしとはいはじ　ものおもへば

八月九月　正月　（一十二月十九日）

一廿九　ながらへてなにかはせむ　田の穂の
澄　月のさやけさ　萩の露　玉ぬき
おもかる　ゆふ　浦松

秋風は　秋の末
秋風の　秋の末
秋風の　秋の末

一廿一　秋の山の　紅葉の
一廿二　鹿鳴　花の咲　秋の
一廿三　秋の　秋の

乃なよ　秋みぢ　秋のくれ
秋きぬ　秋ぞ　秋の
おくれ　秋の夕　秋の
大和　秋の夕　秋の
わが　秋の　秋の
さ　秋の　秋の
秋の　秋の　秋の
ひく　秋の　秋の
秋の　八月　大風
一廿四　なにはの　なにはの
秋の　秋の　秋の

おもひ〳〵賤しからぬ家ども有あるけよかと計なる
世界をくさ〳〵の大和乃ゆかりむらくへ
きくらくのかすかに見えぬくづきさかりの夕き
つまとむらくさとなら

一四四　初雁なくしら　波乃あらさ　舟乃ゆき　風乃ゆき
初雁と八月十五夜俄よ大雨ふりて来ぬ
ゆり二三日の雨ふりもち

一四五　菊ちよの　秋乃神さ　ちよの山　高井
山路出さ　松の梢さ　風乃紅葉さ
二四六　ぢ乃紅葉よ　古ち乃庭　ちよき嶽　風乃すゝき
ふるさまの世の中の秋を考る

一四七　弱なくよ　山乃
ちよ乃ゆき　ちよ乃月さ　ちよ乃雨さ　ちよ乃雪さ　ちよ乃雲さ　ちよ乃霧さ
山乃月さ　山乃ちよ　山乃雨さ　山乃雪さ　山乃雲さ　山乃霧さ
一四八　ちよさめよ　加乃紅葉　雨乃紅葉
九月乃ちよ　雨乃紅葉
ちよさめよ　ちよ乃雨さ　ちよ乃雪さ　ちよ乃雲さ　ちよ乃霧さ
つと八月十日なり
一四九　ちよ乃月さ　ちよ乃雪さ　ちよ乃雲さ　ちよ乃霧さ
一四十　月さむなくよ　月さ　風乃月　秀歌乃月
出乃月よ　秋乃月　秋乃月
一五〇　姫よ　秋乃月　山乃月なる

[illegible]

四十二　一　弱逸　第　月の　秋むしの

[illegible]

四十三　一　弱むしひとつなりし八月十五夜　秋歌

[illegible]

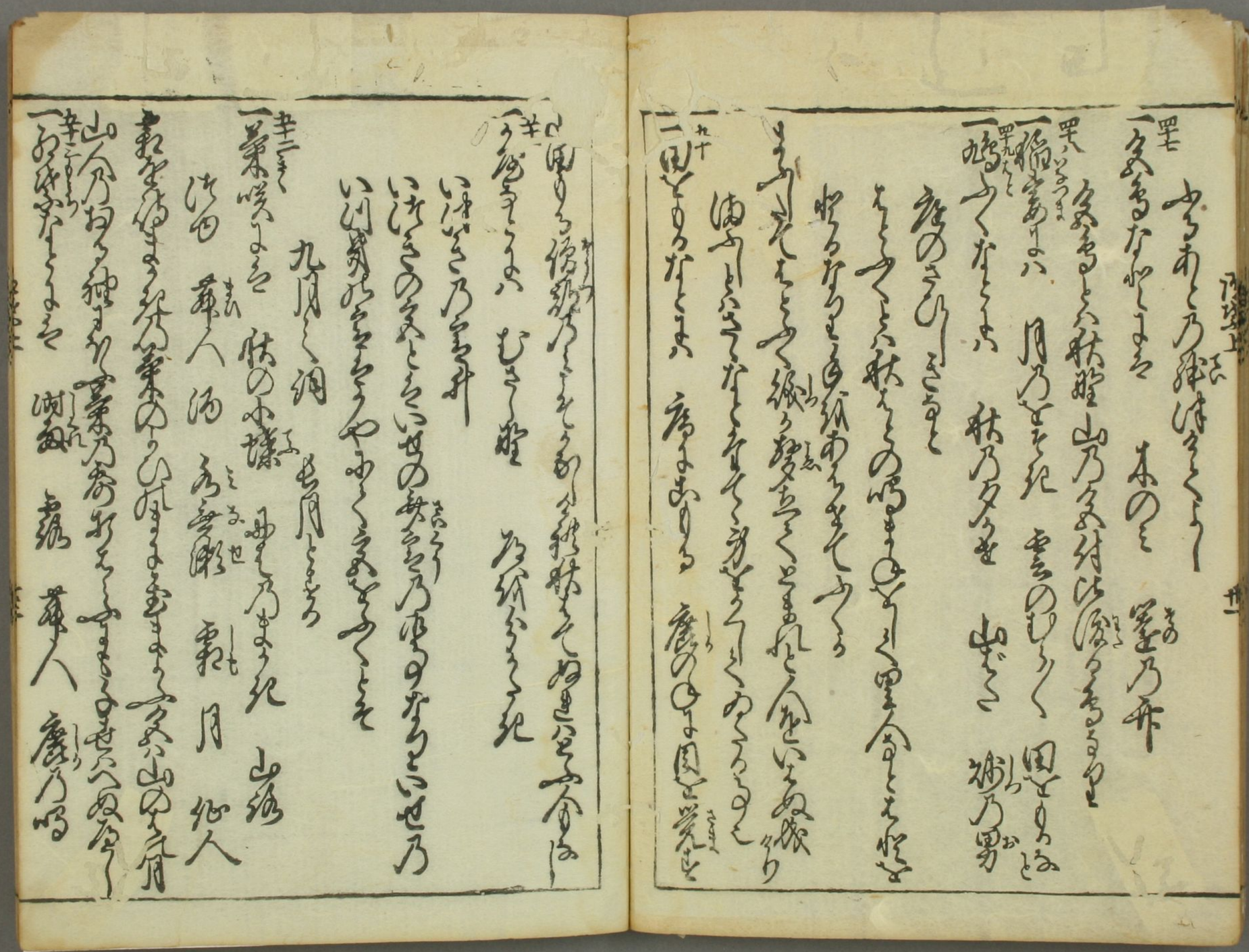
四十四　一　生絹数　秋の歌中　月の　秋歌　川逍

[illegible]

四十五　一　おのひまとつまんぞ　恋

[illegible]

四十六　一　[illegible]



小倉山　車

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六十六 一 雅なるよろ　山里　うろ[illegible]乃山うを

[illegible]

六十七 一 [illegible]　よハ　山乃里

六十八 一 ひ[illegible]　川[illegible]乃も　ひをともるまで

六十九 一 [illegible]乃[illegible]乃[illegible]

[illegible]

七十 一 枝[illegible]乃[illegible]なるよろ　日影よりもるを乃をゆる

七十一 一 [illegible]よ枝乃[illegible]なるよろ　夜の日よりもるるうろ

夜の聖母[illegible]

七十二 一 [illegible]乃[illegible]なるよろ

七十三 一 [illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]

七十四 一 ひ[illegible]なるよハ　[illegible]乃[illegible]

七十五 一 [illegible]

林間[illegible]　[illegible]　[illegible]

続紫葉冬部事類目録

十月之部

一　初霜
二　紅葉
三　紅葉
四　時雨
五　枯野
六　千鳥
七　冬月
八　時雨
九　木枯
十　冬の梅
十一　炭竈
十二　雪
十三　水鳥
十四　雪
十五　冬

十一月之部

十六　初雪
十七　杉紫
十八　雪
十九　冬

十二月之部

廿　冬月
廿一　冬の梅
廿二　冬の梅
廿三　冬の梅
廿四　冬の梅
廿五　冬の梅
廿六　冬の梅
廿七　冬の梅
廿八　冬の梅
廿九　冬の梅
卅　冬の梅
卅一　冬の梅
卅二　冬の梅
卅三　冬の梅

拾遺集巻第四

冬歌

十月ばかりに　祐善月

一　しぐれ
一　時雨とよまず　木の葉ちる　紅葉の乃ちる
雲の乃ちる　霜の乃ちる　露の乃ちる　雪の乃ちる
ものゝこのおほくなるとき

祐善月　時雨の雨れば　ものゝあきらかなる　今の月よりも
下の紅葉　ちるは　山の乃ちるとれば　ぬるゝや　庶の乃ちるとん
木くの紅葉乃ちるとき　時雨よ　濃乃　紅ぬ　拾ぬ　そ　乃
祐善月　ちるは　ちるとれば　紅　時雨　そ　乃　ものゝ
一　乃　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ

時乃　紅乃　紅乃　紅をみく　けきく
月夜のときと入く　紅乃　紅をみく　けきく
祐善月　紅をみく　けきく　ひとあを　乃　乃
乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃
大方　山　山　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃
ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ　ものゝ
月　紅　平　紅　紅　乃　乃　乃　乃　乃
三　一　紅　紅　紅　紅　紅　紅　紅　紅
山風　乃のこえ　松乃巻
乃の乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃　乃

四　一　あるなとよろ　海ちかの間を見わたす　山路
五　の雪　秋の嵐まなしなるなと
一　拾遺　秋ハ　雲乃嶋　雲の海のこゝろ　雲を
嵐乃　雲をしなし　るものゝとは
六　一　みるものよろ　高砂　月さゆる　海乃秋　茅原
嵐乃　高砂　嶋　清海潟
ちらし　蝶ちらし　ゆきを　色の　秋乃海風　ちるもくも也
あらしかさ　ちるもの　ちるよ　ちきめ　海の関
みるかの　の　菅原　風　あそ　ちるの　乃月
なるもの　ちよ　嶋　ひら　ちきめ　乃雲　ちの
世の八潮　海　海　ゆく　嶋　ねさ

七　一　おしの嶋よろ　池のさゆる　嶋乃あこ海
くもなしこせん乃付合なる
小屋の池　おしの　ひ　海　ゆく　ちの　ちらん
ちらしこ　乃　ちらし　ゆ
八　一　鶯嶋よろ　山ちきのあれ
あしのさく　八重乃白雪　金　ちく　ちん
九　一　木ちし乃嶋よろ　月のさゆる　山ちきちき
十　一　木ちし　海さいく　秋　ちき　ちし　あなと
一　嶋　物なとよハ　雪のちし　弱のいと　海
大原　なし海　雄　海

雪深きそらの山ちかく
はるかに見わたす時分の
とれるく海底へ入るをみる
一炭竈なりとよそ　雪そる山　小雄乃おく
大原のかすみ
大原やかすみの炭竈雪ちくさ
十一月ゝ河　ちをの月
一ゆなりとよハ　海色よ雪海き　月乃
さやう　ゆゝ川き
ゆきかき出やあれくとちはんを
ゆゝくみるとちとゝちをの

十二月ゝ　雪の深乃
一ゆ炭なりとよそ　雪のむくゝ
月ちをの　雪のゆるるゝを　木ちれ
山里きひゝ
まよ乃ゆきゝよこゝろ　卯月　雪ゆる
ゆゝ夫よそれゆ　炭竈
月ちをハ月ゆる雪よそれ
海雪よ物ちの行も埋れて
乃ちをとくはりまち雪よ行ちえく
一ゆ炭よそ　雪数　月のさゆ　酒　業人　言のさゆき
ゆゝ乃白ゆれをそる梯をふゆ
久里の天よもゝの祢あをひ今ををあふゝ

一あるれるよそ　竹乃を
板屋ふかうまあなと
玉葉よあるれるぬたるかたのかいとそさゆるとのもろこと
あるその葉乃板屋よあひさしあれ　あれ
竹乃をふかるかりさくふ独らあくさんらてさそね
一月それるとよい　山ふよ独ふ　材葉の長
ふるくよあるそ　ふるそ乃ふ部ふれたおほくあるよ
芦ふいせの矢ふ乃ふあるりあをあるれ竹
ひくふひそおりるを書ふれる月源氏ら
ふるひよふあるりやて源氏やしまひふ
く源氏の紙よきりを好ふる

一芦ふ乃ふ云よそ　華人　酒　百数のゆふあと
芦ふの芦ふ云と中ふ年のひと綱あて神よ
つまふ板天乃ふ乃ふめくあるくあるものあ葉
人神系ふ大酒中ふ数ひる三月のあふ数ふよ板
新蔵乃ふのふるひおふあふそふ死ふ雲の上人
しおふふ神ふひふふあふ神やふふ世のふよひへあれ
芦ふ芦ふ乃ふ酒源氏のふありむりられるひ
しふ芦ふのふふのふやへ
一ふ数よそ　ふれさむ数
書ふふふふひ神系ふふふ数のやふ乃ふの山ふ元
一ふふふふふよ　若あひよ月ふふふあ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪のとまるやうにおもはれよりうつる神垣のひとしきりて

廿五 葉をもて雪よりは焼く葉をもてもれる神垣

一 ゆふ祭りよりは　ゆふ祭りの花はよく変りさそふらん

雪のとまるとのの河風山あひの神垣はしりたちと雲月大酒のくさ

廿六 山祭りの乃波河のさむき　河風寒さむき　月の上の月さやか

一 波乃雪よりは

波の雪とは波乃よりとまるよりは雪乃ちりうるあり

月もとは流れくる月まもなく雪あるく結てう

十二月乃詞

一 梅咲よりは　春ちかしよ　雪もとまるなり

山里ふるのさと

廿八 一 埋火よりは　雪乃消よりあるり　きのまくらくさろ

焼炭　焼よりあるとむとひくさり

山里より雪の積りの雪を板まの風の吹とされく

焼炭を火とうもなし　焼よりあるとむ火なるもし

廿九 一 年のくれよは　いそうく来ぬ　急ぎくる

門松をなとうるとの雪の積よ雪の吹あらん

あるとうは雪乃積といそくくて年をまとうられ

卅 一 なやらふよりは　大きなる雪乃ゆきを雪乃ゆきの

今はとて一年よりはくれのやれるまくくよ年もこれ乃

なやらふとは大酒ゆくくよ　年の尾とはひとりのみ

一 年乃はりのとるよは　灯　ちのゆきく　酒　年の尾とは

[illegible]

問ふくはおもはのもとをとるへきなれはもあるらん

年中のはるをもめにまかりとそ

廿二

一　春霞　よみ人しらす

かすみたつ春霞の紅葉する年のくれなる

春霞とやらむ乃さいなとつるくれなる

[illegible]

廿三

一　春歌　よ人　冬義　唐の[illegible]

雪市よ梅はかむ　[illegible]

[illegible]

後撰集上終